

プロティノスのエネアデスII-9グノーシス駁論にみられる サーンキヤ学派の徴候について

小林博和

1. はじめに

いうまでもなくプロティノス（205-270）は、ローマ時代の哲学者である。プラトンを基盤としつつも独自の概念を展開し、エネアデス¹⁾を著した。プロティノスの展開した論は、その後ネオ・プラトニズムと呼ばれてキリスト教の骨格に染み込むこととなった。例えば証聖者マクシモス（580-662）が確信したゆえに、使徒時代の人物とされた、ディオニュシオス・アレオパギテスの、実はネオ・プラトニズムの思想の色濃い、天上位階論²⁾や同じく神秘神学³⁾が、東西を問わず広くキリスト教世界に流布した事実はこちらを物語るものである。それゆえに、プロティノスの論の理解は、キリスト教世界の理解に必須と言える。

また、プロティノスが、キリスト教をどのように捉えているかという問題が、プロティノスの論を慎重に吟味する必要があることを示している。まず、プロティノスが、アレクサンドレイアにおいて、アンモニオス・サッカスに学び、同門にオリゲネス（185-254）がいることに注意すべきである。オリゲネスは、カッパドキアの三教父の祖師であり、また、天父受苦説を唱えるサベリオス主義に反駁を加えて、三位一体説を支持した教父として、キリスト教神学において極めて重要な位置を占めている。プロティノスがその同門であるということは、プロティノスがプラトンを信奉する哲学者であるとともに、キリスト教神学に対する深い理解を持っていることが、当然、予想される。

さらに、プロティノスがガリエヌス帝（在位 253-268）の寵を受けていたこと、そのガリエヌス帝がキリスト教寛容令（270）を出したことを考え合わせると、プロティノスがキリスト教徒でないのは明らかではあるものの、決してキリスト教と敵対しようとする立場ではないと結論されるのである。

さて、プロティノスのエネアデスの中に「グノーシス派に対して（プロティノス全集, 1987）」という、時のグノーシスを信ずる者、しかもプロティノスが見知っている者⁴⁾から伝えられたグノーシスに対する論駁という、特異的な一編がある。

現代においても、グノーシスが何かについては、極めて情報が錯綜していて、筒井（2004）の概論⁵⁾によれば、グノーシスに影響を与えた可能性のある思想として、ゾロアスター教、ギリシア古来のオルフェウス教、ユダヤ教の「黙示」と「知恵」思想、マンダ教、などが挙げられていて、その全体像は明らかになっていない。むしろ、グノーシスがギリシア語で「知識・知恵」を意味するように、当時の数多くの宗教思想をひとくくりにして、グノーシスとキリスト教徒が呼んだ可能性すらあるのではないかと思われる。

本論は、プロティノスの著述したグノーシス駁論に、インド哲学の一派であるサーンキヤ学派の影響がみられるのではないかという仮説をたて、それを吟味しようとするものである。

なぜそのような目的を設定したかと言えば、プロティノスのグノーシス駁論はまさしく、プロティノスが直接的にグノーシス主義に接して、それを理解しようとしたものであり、その論を分析することは、グノーシスの理解に強力な手段を与えると考えられるからである。また、グノーシス駁論に対する理解は、近年我が国に散見される、ロマンティックなグノーシス解釈⁶⁾が必ずしも適切ではないことを示すものでもある。

2. プロティノスの駁論とインド哲学との関係性

2.1. 紀元前後のギリシアとインドの関係

グノーシス主義とインド哲学との関連を述べる前に、まず最初にギリシアとインドが全く別の物であるという素朴な思い込みを排除しなければならない。古くはアレクサンダー大王がインドに入る直前であるヨーギに出合って故国へ引き返したという話があるが、その他にも、ギリシアのセレウコス朝に仕えたメガステネス（紀元前4世紀末頃）が、セレウコス朝とインドのマウリヤ朝の間で協定が結ばれた後、使者としてマウリヤ朝へ赴き、チャンドラグプタ王に何度も謁見し、10年ほどかの国に滞在して、当時のインドの内情を記した『インド誌』を著したという記録があるように、あるいはギリシア人のインド王朝（インド・ギリク朝）が、かつて存在していたことが知られているように（「ミリンダ王の問い」などは著名な例である）、ギリシアとインドの交流は決して浅いものではない（S. Kak, 2005）

その他にも、例えば以下の論述、「2～3世紀のグノーシス主義がサーンキヤに影響を受けているのは間違いない、殊に、魂と物質の対立概念その他はサーンキヤ学派に由来している（The influence of Indian philosophy on Christian Gnosticism in the second and third centuries seems at any rate undoubted. The Gnostic doctrine of the opposition between soul and matter, of the personal existence of intellect, will, and so forth, the identification of soul and light, are derived from the S' nkhyā system.）」を述べたのは、A. A. Macdonell（1900）である。

2.2. プロティノスの論駁したグノーシスとサーンキヤ

さて、プロティノスの云うグノーシスが余りにインド哲学に近いことに驚く。例えば、プロティノスの言う「（世界の）原型は彼らによれば、その制作者がすでにこの世界へ傾いたときの産物なのである」⁷⁾の、「傾いた」⁸⁾あるいは「迷った」という語を伴う不可思議なグノーシスの論の説明は、ヴェーダーンタ学派の説にあるように、最高神が世界を創造するのは、その迷いのためであって、「アートマンなる神は、みずからの幻力（迷妄、マヤー）によって、みずから自己を分別する」と一致するように思われる（中村元，1968，p1-45）。しかし、プロティノスの活躍した期間を考えると、両者の関連を示すためには、この説がヴェーダーンタ哲学をとりまとめたシャンカラ（700～750）以前に成立していたことを探し出さねばならない。

プロティノスがグノーシスについて言う、「（世界の）原型は彼らによれば、その制作者がすでにこの世界へ傾いたときの産物なのである」にある「傾いた」という語は、プロティノスのいうグノーシスが、サーンキヤ学派が説く哲学により近いのではないか。古典サーンキヤ学派の云う、「永遠に変化することのないプルシャの観照を契機に、物質原因あるいは第一原因といわるプラクリティの平衡が破れると、これから様々な原理が展開してゆく」（中村元，1996）は、まさにプロティノスの駁論との関連を示唆するのではないか。

3. サーンキヤ学派の影響の抽出

プロティノスの「グノーシス派に対して」の論に現れる諸概念については、インド哲学との関連を否定し得ない。そこで、両者の関連性について考察してみる。目標は何らかの方法で、両者の関係性を定量的に示すことである。

3.1. サーンキヤ学派について

プロティノスの友人のグノーシス主義とサーンキヤ学派の哲学との連関について、定量的推定を行うためには、サーンキヤ学派の考え方を知る必要がある。最初に「ヨーガとサーンキヤの思想（中村，1996）」と「古典サーンキヤ体系概説（服部正明，1960）」を併せて分析して、サーンキヤ学派の主張を中村元の解説をベースにマッピング⁹⁾してみた。どちらの書籍も基本的には、4 x 5 世紀ころに、イーシュヴァラクリシュナによって執筆された『サーンキヤ詩』の訳あるいはこれに対する説明もしくは注釈である。

イーシュヴァラクリシュナの論は、プロティノスの活動した時期から、100～200年程度後の時代であるが、サーンキヤ哲学の始祖とされるカピラの活躍がBC300年前後という説がある。従って、少なくとも、プロティノスの時代にサーンキヤ学派の哲人が居たことは、間違いないであろうから、「サーンキヤ詩」の内容とプロティノス時代のサーンキヤ学派の考え方との相違は、小さいと仮定しても大きな矛盾は生じないであろう。ただし、この前提はインドとローマ相互における哲人やその著作の、時代的な前後関係を精査した結果ではない。著作やそこに著された思想の伝達と変化の、時間的な順序関係を正しく検証することは、本論の範囲を超えるものだからである。

さて、サーンキヤ学派は一般的には、「精神と物質の二元論の立場に立った哲学として、インド思想史においては古来きわめて重要である…精神的原理としての純粹精神（プルシャ）と、物質的原理としての根本原質（プラクリティ）という二つの実体的原理を想定した。そして、永久に実在するものはこの二元だけであるとし、世界創造神とか主宰神というようなものを想定しなかった」（中村，1996）といわれる。

確かにサーンキヤ学説は二元論であるとは云えるが、『サーンキヤ詩』を吟味していくと分るように、その二元が対等の立場にあるとは考え難い。『これ〔知識〕によって、〔舞踏の〕観客のように寛いで座っている精神原理は、〔根源的思惟機能・自我意識などの諸原理

を] 生み出すことを停止し、目的の力によって、七つの状態から離れた原質を眺める』(SK., 65¹⁰⁾)、『一方のもの〔観客である精神原理〕は、「わたしはすでに見た」といって無関心になり、他方〔舞妓である原質〕は、「私はすでに見てもらった」といって止める。

「すでに精神原理の目的は達せられているので」両者が結合しても「これからさらに世界」創造の動機は存在しない』(SK., 66)とある。つまり、サーンキヤ詩は、最終的に到達すべき状態として設定されている、解脱の様子を述べるのであって、確かに、プルシャはプラクリティを見ることにより影響は受けるのであるが、輪廻を巡る実体は「舞う」方のプリクラティ(原質)であるように考えられるのである。

繰り返せば、精神原理であるプルシャが男性名詞で、世界の原質であるプリクラティが女性名詞であることを念頭にいれると、我々が輪廻のただ中であって、精神原理プルシャに「見られつつ」あるゆえに、プラクリティは輪廻という「舞踏を踊って」、その身体の周りに世界を作り続けているのであると、「サーンキヤ詩」が述べていることが分る。

3.2. プロティノスのグノーシス駁論とサーンキヤ詩との比較方法

当然のことながら、プロティノスの記述はギリシア語でなされ、われわれが読む日本語訳はギリシア原文を参考にしながら各国語訳をもとに作成されたものである。サーンキヤ詩についても同様で、われわれが目にする日本語は原文から何人もの執筆者の手を経て作成されたものである。それゆえ当然ながら、そこには翻訳に伴う錯誤が入り込んでくるであろうし、逆に言えば真なる比較ができるとも考えられない。ただ、我々が両者を読んで、それぞれにその意味を理解できると考えられるならば、理解という観点から、すなわち単語そのものではなく、その意味という観点から両者を比較することは可能であろう。

そこで、本論では、プロティノスのグノーシス駁論に現れる、グノーシスに関する記述を、その内容により分類したうえでサーンキヤ詩との比較・解釈を施し、マッピング手法を用いて考察する。すなわち、今後、プロティノスが当時目にしていたグノーシス主義を紹介していると思われる、別の文書を分析するとき、この手法を同様に適用して、マッピング結果を比較することによって、プロティノスが対象としてグノーシス主義がどのようなものであると観たかを、いつでも同じ手法により、検証することができるようにするためである。

なお、これらの作業の開始前に、グノーシス駁論とサーンキヤ詩の解説(中村, 1996)を、マッピングにより分解し、それぞれの論について、分解された文節同士の関係性を明らかにしておくという準備作業を行った。

4. グノーシス駁論にみられるプロティノスのグノーシス観

プロティノスのグノーシス主義に対する反駁を述べた、エネアデス「グノーシス派に対して II-9」においては、「彼ら」という明示的な指示語(訳者が補足した部分を除く)を使ってグノーシスに論及する文節と、「彼ら」という指示語は使われていないが、暗示的に

グノーシスを論ずる文節がある。まず、この指示語を手がかりに、プロティノスの記述を以下のように分類する。

- (1) u : unrelated: グノーシスと無関係な記述
- (2) o : opposite: グノーシスををプロティノスの立場から批判する記述
- (3) e : explicit: グノーシスを直接的に主語とする記述
- (4) i : implisit: グノーシスを直接的に主語としない記述

4.1. グノーシスと無関係な記述

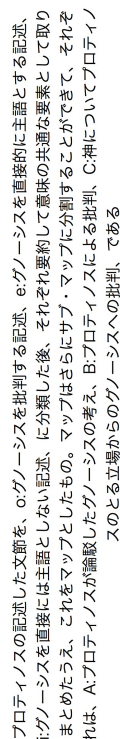
例えば、「というのは、彼ら（天球）の身体が火に類するものであるとしても、それは全宇宙および地球に対して適切に釣り合った状態にあるのだから、恐れる必要はない。むしろわれわれは、彼らの魂に注目すべきである」という文節にある「彼ら」は、「天球」に対する人称代名詞の形式をとった指示名詞であり、グノーシスとは無関係な記述であると考えられるので、本論ではこれについてはこれ以上言及しない。その記述の総個数は 16 である¹¹⁾。

4.2. グノーシスをプロティノスの立場から批判する記述

「彼ら」は確かにグノーシス主義者を指しているのであるが、文節はプロティノスの立場からグノーシスに対する反駁であり、ここから逆にグノーシスの考えを或る程度推定できる。例えば「もし人々が少ないものを置くならば、彼らは、魂とヌース（知性・精神などを意味するギリシア語）とが同一のものであると主張するか、それともヌースと第一者とを同一のものとするか、どちらかであるだろう」という、プロティノスの記述（1-18）からは、「グノーシスが始原を認めるならば、魂とヌース、あるいはヌースと一者の誤った同一視がある、つまりグノーシスは始原が一者ではないとしている」なる、グノーシスの考えが推定できる。このタイプに分類された記述とその関係は図 1 に示される。その記述の総個数は 26 である。

4.3. グノーシスを直接的に主語とする記述

グノーシス駁論において、「彼ら」という指示語を用いてグノーシスを論駁する文節がある。例えば、「さらに、彼らがあのような第二の魂を一彼らが諸元素から合成するところの魂を一ひそかに持ち込んでいることも、不合理である」という記述（5-17）は、「グノーシスによれば、諸元素から新たな魂が合成される」と読み替えることができて、このタイプに分類された記述も図 1 に示される（e. 6(5-17) のよう示した）。その記述の総個数は 62 である。



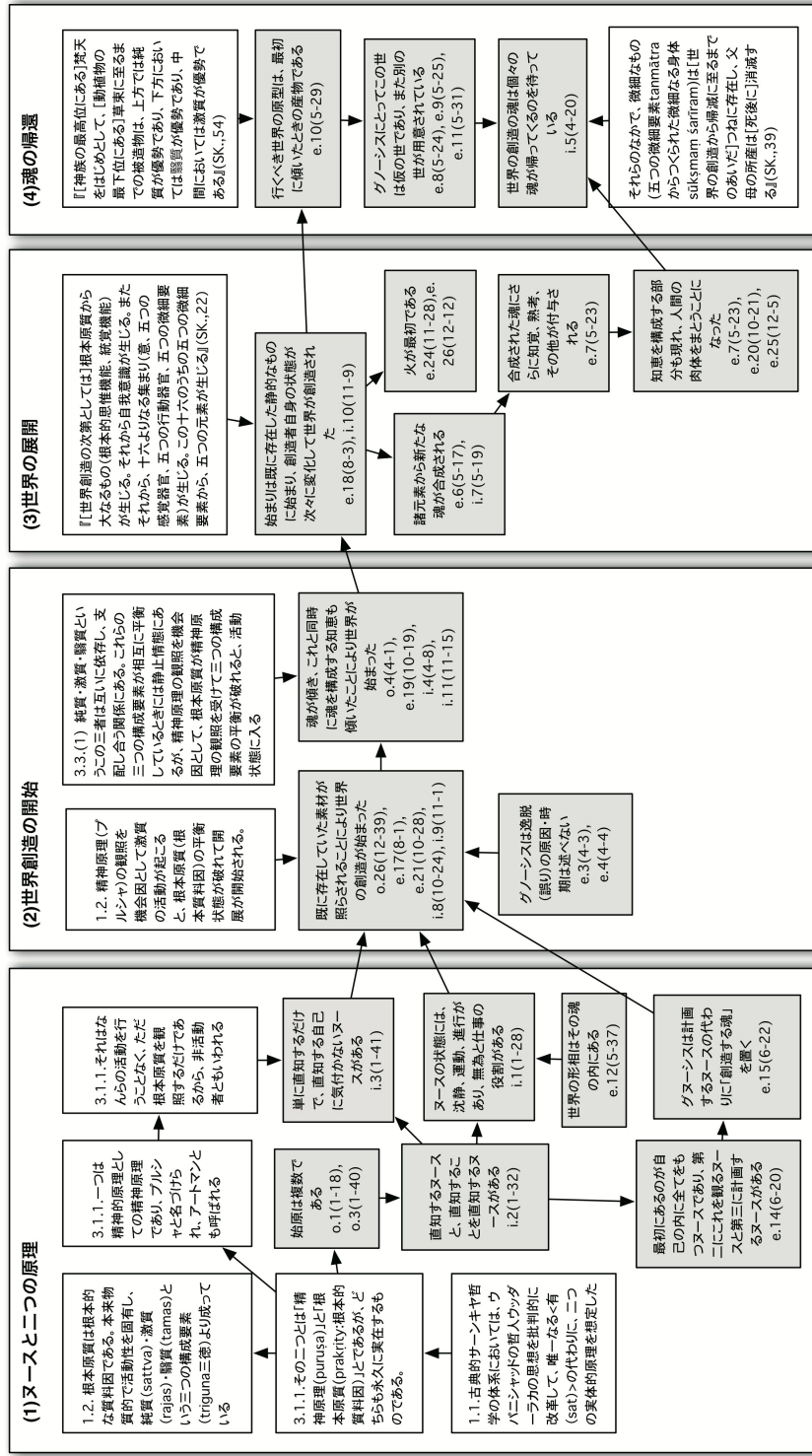


図2 プロティノスが観察したグノーシスの世界観とサーンキヤ学派の哲学との比較

マスクした要素はプロティノスの頼たグノーシスの世界観であり、その他はサー
ンキヤ学派の世界観である。グノーシスの世界観については、プロティノス著作
の記述タイプ、番号、参考文献中の記述位置を英数字で示している。サーキヤ
学派の世界観については参考文献の位置、もしくはサーンキヤ詩 (S.K.) の番号
を示している

4.4. グノーシスを直接的に主語としない記述

プロティノスのグノーシス駁論には、グノーシスを直接的に主語にしないが、明らかにこれに論駁を加える文節もある。例えば、「さらにまた、直知するヌースと、直知することを直知するヌースとがあるという理由で、ヌースを複数化することもできないであろう（1-32）」とあり、これは「グノーシスでは、直知するヌースと、直知することを直知するヌースがある」と読み替えることができ、この記述も図1にi.2（1-32）のような記号とともに示した。その記述の総個数は12である。

5. グノーシス駁論にみられるサーンキヤ学派の徴候

プロティノスの述べたグノーシス駁論をマップにより図1のように表現すると、マップはさらに三つの部分に分けられることがわかる。これを図1にサブ・マップA～Cとして区分して示した。すなわち、サブ・マップAが、プロティノスが論駁したグノーシスの考え、特に世界が如何に創造された（展開された）かを表した部分であり、サブ・マップBが、プラトンの後継者であることを自認する、プロティノスの立場からみた、グノーシス主義に対する批判、そしてサブ・マップCが、プロティノスの立場から見て、神と世界靈魂とについて、如何にグノーシスが無知であるかについての批判である。

即ち、このサブ・マップAがグノーシスの考えを示していると考えられる。そこで本論では、このサブ・マップAについて、対応すると考えられるサーンキヤ詩、あるいは中村（中村，1996）が解説するサーンキヤ学派に係る説明との関連について論ずるものとする。

5.1. 世界の創造に係るグノーシスとサーンキヤ詩との対応関係について

上に述べたサブ・マップAにおける世界創造の順序を、サーンキヤ詩とその解説（中村，1996）が述べる世界創造と輪廻とを並列的に示したものが図2である。図中にはサーンキヤに係る記述の位置を3.3.(1)のように示した。これは（中村，1996）の第二編の）第3章の三の（一）中の文節であることを表す。世界創造に係るマップは、さらに、以下のセクションに分割できる。そのそれぞれについて、プロティノスの記述とサーンキヤ学派あるいはサーンキヤ詩の述べるところが対応することを以下に示す。

(1) ヌースと二つの原理

サーンキヤ哲学体系においては、二つの永遠なる実体的原理が想定されており、既に述べたように、一つが根本原質（ブラクリティ）であり、一つが精神原理（プルシャ）である。プルシャは何ら活動することなくブラクリティに無関心で、ただそれを観照するだけである。一方、ブラクリティは三つの要素（グナ）で構成されていて、その三者とは純質・激質・翳質であり、これらから世界が開展される。

この二つの原理について、プロティノスは、「始原は複数であり、直知するヌースと直知

することを直知するヌースがある」と述べ、プラクリティとプルシャについて「最初にあるのが自己のうちに全てをもつヌースであり、第二にこれを観るヌースと第三に計画するヌースがある」、「グノーシスは計画するヌースの代わりに『創造する魂』を置く」と述べる（第三のヌースに対応するものについては後述する）。

また、プラクリティの原質であることとその変化、およびプルシャの無活動について、プロティノスは、「世界の形相はその魂の内にある」、「ヌースの状態には、沈静、運動、進行があり、無為と仕事の役割がある」と述べて、サーンキヤとの対応が支持されるのである。

(2) 世界創造の開始

世界創造の開始について、サーンキヤは以下のように説明する。根本原質（プラクリティ）は、の三つの構成要素（グナ）である純質・激質・翳質の三者は、相互に平衡状態にあって静止しているのであるが、精神原理（プルシャ）がプラクリティを観照したとき、三者の平衡が破れて活動状態となり、世界の展開が開始される。ただし、サーンキヤ哲学の目的は精神原理あるいは自我意識の解脱であって、その始点は重要視されていない¹²⁾。

これに対してプロティノスは、「既に存在していた素材が照らされることにより世界の創造が始まった」、「魂が傾き、これと同時に魂を構成する知恵も傾いたことにより世界が始まった」、また、「グノーシスは逸脱（誤り）の原因・時期は述べない」と言うのである。

(3) 世界の展開

世界創造が始まると次々に展開が続く。サーンキヤによれば、根本原質から根源的思惟機能が生じる。根本的思惟機能が最初に出現し、これがさらに展開することから、これが前述の「第三のヌース」に対応すると考えられる。次に、この根本的思惟機能その中に含まれている激質によってさらに展開を起こし、その結果として自我意識が生じる。次に、その自我意識から、その中にある激質の力によって二種類の創造がなされる。一方では（人間の）十一の器官が生じ、他方では五つの対象領域の微細要素が生じる。根源的思惟機能・自我意識・五つの微細要素によって微細身が形成され、肉体が減じた後にも永続的に存在し、輪廻の主体となる。

これに対してプロティノスは、「始まりは既に存在した静的なものに始まり、創造者自身の状態が次々に変化して世界が創造された」とサーンキヤの順次的な世界展開を支持する。また、「諸元素から新たな魂が合成される」、「合成された魂にさらに知覚、熟考、その他が付与され」、「知恵を構成する部分も現れ、人間の肉体をまとうことになった」と述べるのである。ただし、プロティノスの「（世界創造にあたって）火が最初である」という記述がサーンキヤと関係があるかどうかは不明である。

(4) 魂の帰還

サーンキヤ詩 39 に、「それらのなかで、微細なもの（五つの微細要素からつくられた微細なる身体）は〔世界の創造から帰滅に至るまでのあいだ〕つねに存在し、父母の所産は〔死後に〕消滅する」とあって、肉体は消滅するが、微細な身体は輪廻を続ける。最終的には根本原質は解脱するのであるが、サーンキヤ詩 68 に、

「〔精神原理が〕身体から分離されるにいたり、目的が果たされたのであるから根本原質は活動を停止する。そのときに〔精神原理〕は決定的でかつ究極的な独存〔解脱〕に達すると述べられる」。

またあらゆる被造物は三種のグナに起因するものであり、これをサーンキヤ詩 54 では「〔神族の最高位にある〕梵天をはじめとして、〔動植物の最下位にある〕草束に至るまでの被造物は、上方では純質が優勢であり、下方においては翳質が優勢であり、中間においては激質が優勢である」と述べる。

これに対してプロティノスは、「グノーシスにとってこの世は仮の世であり、また別の世が用意されている」と表現し、「行くべき世界の原型は、最初に傾いたときの産物である」と述べ、「世界の創造の魂は個々の魂が帰ってくるのを待っている」とするのである。

5.2. グノーシス駁論とサーンキヤ詩との関係を「否定するものではない」という結論

さて、本論は、プロティノスが論駁したグノーシスが、サーンキヤ哲学をたとえ部分的にせよ継承すると自らを考える、思想グループであったことを示そうとするものであるが、その追求はプロティノスの眼を通したものである以上、間接的なものであり、これのみで両者の関係を証明することは不可能であろう。

一方、両者の対応関係がサーンキヤと全く無関係に成り立つ、ことが可能かどうかという点については、幾分かの情報には得られるのであって、例えば、プロティノスの時代にローマと緊張関係にあったペルシャで盛んであった、ゾロアスターを取り上げてみよう。プロティノスが論駁したこのグノーシスの論は、善悪二元論に立っていないという点からみて、明らかにゾロアスター、あるいはゾロアスターを起源とすると考えられるマニ教とは無関係であることが分る。

即ち、ゾロアスター、マニ、その他プロティノスの時代に存在したであろう様々な哲学・宗教と、この駁論との対応関係を調べれば、その相対的な近似の程度は計れるのであって、現在に至る当時の文献資料が限定されていることを考えに入れれば、これまでに述べた、プロティノスの論駁するグノーシスとサーンキヤとの関係を、「高い確信を持って、これを否定するものではない」という結論に至ることができるのである。

5.3. グノーシス駁論に見られる気付き

これまでの議論は図 1 のサブ・マップ A について述べたものである。サブ・マッ

ブ B は、プロティノスの自己の信条によるグノーシスに対する批判であるが、サブ・マップ C については、幾つか興味深い事柄を発見することができる。例えば「自分たちが病気から守ることができるということなどは無意味である」というプロティノスの批判は、プロティノスの周辺でグノーシスが、病気から信ずるものを守ることができると言っているということであり、結果として、この言説は、彼らを信ずる人びとが一定数存在することを示すものである。

また「グノーシスが、かの世界に対して呪文により説得を試みるのは誤りである」という記述は、グノーシスが、サーンキヤではなく、例えば、サーンキヤ学派と密接な関係にあるヨーガ学派¹⁴⁾の態度、例えば「ヨーガ・スートラ、第二章、(一)の注解『…学習(読誦)とは、聖音など浄めの文句を唱えること…主宰神を専念することとは、一切の行為を最高の師のうちに向けること…』(中村, 1996, 183p)」を想起させるものである。ただし、考察をヨーガ学派まで広げることは本論の範疇を超えている。

6. 今後の課題

以上のように、プロティノスが論駁する、グノーシス主義者の主張にみる、サーンキヤ学派の徴候を示してきた。それでは、プロティノス自身はこのグノーシス主義をどのように咀嚼していったのであろうか。一般的に言えば、プロティノスが、サーンキヤ学派の神を想定しない徹底した合理主義やそこから導きだされる、人間の認知に関する深い洞察などに、賛意を持ったとは到底考えられない。

しかしながら、既に述べたように、プロティノスがキリスト教がローマ帝国によって容認される過程にあって、必ずしもキリスト教に敵対する態度を示さず、またプロティノスのエネアデスににじみ出る、彼の率直で公平な態度を考えると、彼がグノーシスを論駁した後、単にこれを捨て去ったのであると結論付けるのは、早急に過ぎると思われる。彼を源流とするネオ・プラトニズムが後世のキリスト教世界に与えた影響の大きさを考えると、彼がグノーシスを全否定したと単純化することは、軽率であろう。

プロティノスはその思想にグノーシス主義を幾分かでも取り入れたのではないか、という仮説の設定は、その可能性の検出の困難さはあるものの、期待される成果を考えると、考察し続けるべき課題であると思われる。

註

- 1) エネアデス(九編集)は、プロティノスの弟子のボルフェリオスを取りまとめた論文集であり、六巻それぞれに九編が編まれているところから、この名称が使われている。
- 2) ディオニュシオス・アレオパギテスの天上位階論(中世思想原典集成・1994)の第三節「われ

われの知性は、**現れている美しさを隠れている美しさの写しと捉え**、感覚で捉えることのできる芳香を、**知性で捉えることのできる発散の象徴と捉え**、物質的な光を非物質的な光の賜物の似姿と捉え、聖なる悟性的思考の訓練を知性による観想の充満と捉え、この世のもろもろの配列の秩序を神に属する事柄にふさわしい調和のある整えられた状態と捉え、聖なる聖体に与ることをイエスに与ることと捉えたりする」と書かれた部分の太字部分などは、それまでのキリスト教父の教えとは全く異なると言ってよいだろうから、この書は教父の教えと云うよりは新プラトン主義（もちろんその当時は主義というようなカテゴライズはされていなくて、師弟関係あるいは先人の論を引き継ぐという状況を後代の人がそう呼ぶに過ぎないのだが）の解説、あるいはこの書が書かれた時期の新プラトン主義者の、非物体的な知性である天使群が天上で位階を形成している、というヘブライズムの新プラトン主義の立場からの説明として読むべきではないのだろうか。この後、天上位階論は、ヨーロッパにおけるそれ以降の天使のイメージの基礎となったとされているから、確かに偽書でありながらキリスト教に深く組み込まれることとなったという歴史的事実はもう打ち消す事ができないのである。

- 3) ディオニュシオス・アレオパギテスの神秘神学（中世思想原典集成・1994）の論は、神から出発して下降に伴う付与を実体とする肯定神学と神に向かって上昇する過程の除去を実体とする否定神学について説明したものと捉えた方がよいのではないと思われる。少なくとも肯定神学は否定神学の反対の概念であると定義されるのみで、肯定神学そのものを説明する資料が少ないので、あるいはこの論が肯定・否定神学の源流である可能性もあり、無視できないのだ。日本語の資料も少なく、例えば、キリスト教神学用語辞典（2005）には、肯定神学を「cataphatic theology、神の自己啓示に基づいて神を積極的に論じる神学の形態、否定神学の反対」と説明しているが、否定神学も「apophatic theology、有限な人間の能力の枠内では、神を概念化できないとする考え」（同書）のように説明される程度であって、探求を続けるべきであると思われる。

肯定神学について「それは、あらゆる付与を超えているものを付与するには、そのものにいつそうよく類似しているものから仮定的に肯定を付与することが必要であり」、否定神学について「あらゆる除去を超えているものを除去するには、そのものからいつそう遠ざかっているものから除去することが必要だからである」とアレオパギテスは述べるのであるが、その結果として「万物の完全で一なる原因はあらゆる付与を超えているのであり、あらゆるものから絶対的に隔絶して一切のものの彼方にあるものの卓越性はあらゆる除去を超えているのだから、それ（神）には付与も除去もまったくないと、正・反・合の原形がここに示されているのだと考えることもできる。

否定神学とこれと対をなす肯定神学に係るディオニュシオス・アレオパギテスの論は中世のトマス・アクイナスの思想にも流れ込むのであることを考えると、ここから哲学への流れと信仰への流れが分流しているのではないかという仮定が成り立つのではないか。そうすればさらにそこから二つの仮定を立てることができて、一つはネオプラトニズムという、明らかな異端の教えが、正統に組み込まれることによって哲学の分野における前述の正・反・合の原形の提示がキリスト

教的正統性の裏付けをもつこととなったのではないかと、二つ目として信仰面から考えると、明らかに異端の教えがいつの間にか体系に組み込まれていった結果、その矛盾から湧き出す緊張感のゆえに、キリストの人間性についての想いと検証の道が繰り返し辿られることになったのではないかとも思われるのである。

- 4) プロティノスが自論のなかで、グノーシス主義者に対して、「彼ら」という指示名詞とともに、
「君」や「諸君」などとよびかける部分があって、プロティノスがグノーシス主義者を見知っている、あるいは少なくとも同時代に生きていることを示している。
- 5) グノーシスについては、幾多の記述が錯綜していて、いかにも全体像が捉え難い。ところが、近年（1945）ナグ・ハマディでコプト語で書かれたグノーシスの諸文書（ナグ・ハマディ文書）が発見されて、グノーシスに対する理解が大いに進んだと考えられている。ナグ・ハマディ文書は単に初期キリスト教徒が参考に使っていた文書群であり、グノーシスそのものを伝えるものではないが、グノーシスがキリスト教内部に生まれた異端ではなく、独自に発展してきたもの、あるいは東方から伝わってきたものであることが示された。このような研究進展を受けて、やっと、1966年4月にイタリア・メッシーナ大学で開催された、グノーシス主義研究者たちの「国際コロキウム」でグノーシスを定義する、通称「メッシーナ提案」が提言されて採択された。このメッシーナ提言において、「紀元2世紀から3世紀頃のキリスト教グノーシス体系を『グノーシス主義（Gnosticism）』と定義し、より広い意味での『秘教的知識』の歴史的カテゴリーを「グノーシス」と定義した。その提言のなかで次を満たす思想が「グノーシス主義」と呼ばれることになった。それは、「この宇宙は劣悪な創造神が造ったもので、この創造神は善なる至高神とは対立関係にある」、「人間の内部に『神的火花』、『本来の自己』が存在するという確信」、「人間に自己の本質を認識させる救済啓示者の存在」の三つである。
- 6) 我が国におけるグノーシス理解がどのようなものであるかは、
 1. グノーシス、筒井賢治、講談社選書メチエ、2004
 2. グノーシスの神話、大貫隆、岩波人文書セレクション、2011
 3. グノーシスとはなにか、マドレーヌ・スコペロ、せりか書房、1997
 4. グノーシス主義の思想、大田俊寛、春秋社、2009などに見ることができる。なかでも太田は、「今日におけるグノーシス主義をめぐる言説は、ロマン主義的な捉え方と文献学的・歴史学的実証主義に基づくものに大別されるが、グノーシス主義という対象を前にして、いずれも限界に突き当たっている…特に日本の研究においては、代表的な文献学者たちが、グノーシス主義の思想を『自己実現』の物語と捉えるユング的解釈を大枠において受容してしまっている」と批判している。
- 7) エネアデス II-9の第5章29行
- 8) 「傾いた」はエネアデス IV-3「魂の諸問題について第一編」6-21にもあるが、「傾く（ネウエイン）」という言葉は、魂の物質界への降下との関連で用いられるばあいが多い、とされている。
- 9) 論理的な記述文を、文節あるいは要素に分解し、文節あるいは要素相互の関連性を表す二次元マッ

ブに変換する作業（小林，2014）

- 10) 記号、例えば S.K., 22 はサーンキヤ詩 22番を示す
- 11) 例えば u. 1 (13-3) とは、グノーシスに無関係な 1 番目の記述で、第 13章の 3 行目に始まる文節を指し示す。ただし、プロティノス全集においては行番号が不正確な場合があることに注意しなければならない。この unrelatedタイプの番号と出現する位置は以下の通りである。
u. 1 (6-50), u. 2 (7-38), u. 3 (8-31), u. 4 (8-38), u. 5 (9-20), u. 6 (9-44), u. 7 (9-56), u. 8 (9-73), u. 9 (12-1), u. 10 (13-12), u. 11 (13-14), u. 12 (13-17), u. 13 (13-21), u. 14 (17-45), u. 15 (18-32), u. 16 (18-34)
- 12) 中村元 (1968) によれば、「(インド人の) 消滅変化の現象界よりも、その背後にあるものに注意するという思惟傾向は、具体的な経験的事実についての時間の観念、特に時差の観念を著しく麻痺させざるをえない」(第二編第六節 [三]) とある
- 13) 大貫隆 (2010) によれば、ナグ・ハマデイ文書第八写本第一文書 (NHC VIII, 1) には、存在の底辺 1「この世界」から始まって 11番目の「一者」に至る層構造と多数の存在(アイオーン)が記されているが、その、3層にアンティテュボス(対型)、4層にパロイケシス(滞在)、5層にメタノイア(回心)なるアイオーン、が記されている
- 14) サーンキヤ学派とヨーガ学派とが密接な関係にあることは、種々の事実から知られているとされる(中村, 1996, 56p)

参考文献

- プロティノス、プロティノス全集、中央公論社、1987
- 上智大学中世思想研究所、中世思想原典集成(3)、平凡社、1994
- ドナルド・K. マッキム、キリスト教神学用語辞典、2005
- Subhash Kak, Greek and Indian Cosmology: Review of Early History, History of Science, Philosophy & Culture in Indian Civilization, vol. 1, part 4 (A Golden Chain, G.C. Pande, ed.), pp. 871-894, 2005.
- 東洋人の思惟方法 1、中村元選集、第1巻、春秋社、1968
- ヨーガとサーンキヤの思想、中村元選集 [決定版]、第24巻、春秋社、1996
- 世界の名著 1 バラモン教典 原始仏教、古典サーンキヤ体系概説、服部正明、中央公論社、1960
- A. A. Macdonell, A History of Sanskrit Literature, 1900, 423-42
- 小林博和、セルフ・ディベロップメント教育におけるマップ技法の適用ー概念伝達におけるマップの意義ー、The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要、第4号、2014
- グノーシス、筒井賢治、講談社選書メチエ、2004
- 大貫隆、認識から体験へ、Heidegger-Forum, Vol. 4, 2010